雑感：―セン測度について

① センの測度の中の貧困概念、その構成に抱えられている不平等概念（相対的貧困）の組み込まれ方、これを「入れ子」状態と表現すれば、その「入れ子」の形、大きさ、入り方などを、どう読み込むことができるのだろうか？

貧困は低所得問題であり、社会の一部、低所得層の問題として、貧困概念が定義されている。センの貧困測度においても、貧困は貧困者の所得動向のみを問題とする社会的厚生関数として構成されている。しかし一方の不平等問題は社会全体の問題として、社会全構成員の所得情報、その動向によって把握されるべき概念構成といえよう。

そこでセン測度に組み込まれた不平等測度（ジニ係数）は、この二つの概念の違い、解離をどう組み込み、どう調整をはたしているのだろうか？言い換えれば相対的貧困概念＝（不平等問題）の含意、心理社会的な側面の捕捉において、貧困は低所得状態の人々の問題である一方で、不平等問題は社会全体の構造問題であり、この二つの概念の相違齟齬を、セン測度の構成はどのような調整を果たしつつ、成立せしめているのだろうか。

② 不平等問題を抱えているセン測度において、貧困の中の相対的貧困、格差、不平等問題を補足するのがジニ係数であろうが、このジニ係数は貧困者内部の所得分布のみによっている。そのことは貧困線以上の所得の人々（非貧困者）の所得は、すべてを貧困線水準＝（非貧困状態）として所得データを処理している。

③ セン測度は、①②の、「打ち切り」の手法をとっており、貧困線以上の人々（冨者）の所得額は打ち切り＝（非貧困者の所得はすべて貧困線所得）として、すべての非貧困者の所得を貧困線所得と仮定して処理している。しかし、不平等とは社会全体の問題であり、非貧困者（冨者）の所得水準がより一段と高い社会の場合には、その社会に生活する貧困者の不平等感はどう動くのだろうか。

④ 新しい貧困とされる「相対的貧困」とは「剥奪」という社会心理額的な概念によってその概念枠を括っている。

貧困者の心理として、自分達と富裕者の所得の天文学的な違いについて、それは無縁な問題だと心情的に割り切り、不平等感覚に影響はないのか？あるいは社会全体の所得格差、貧者と冨者の所得の懸隔の大きい社会では、貧困者の不平等感はより大きく感じられるのだろうか？この点をどう貧困度に反映できるのか、その点が、今後の1%と99%の格差の拡大するであろう世界経済の中で、貧困測定における重要な問題として浮上するのではないだろうか。貧困測定において、現実の貧者の心理社会的側面の把握におい

て、重さが増すであろう問題として、この点が登場する可能性は否めないであろう。

貧困に対峙する人々の心理問題は、背後の事実関係を反映していると考えるならば、その事実関係をどのように所得分布の諸相と関連付けて、切り出し得るのか？そしてそれをどのように貧困度に反映させ得るのだろうか？

そこでは社会全構成員の所得データ、つまり非貧困者（富者）の所得データをも情報として検討され得る形式において、貧困と不平等を関係づける、そのような形式を求めると言う選択もあり得るだろう。

⑤ しかしセン測度においては、社会内の貧困順位を問題にしつつも、それが貧困者内部の格差の構造であり、貧困線以上の人々の所得との関係を問いかける事ができない、富者と貧者と間の所得格差については問題にできない構成、（打ち切り）といえよう。貧困線水準・貧困者内部バラツキの捕捉を求めて結果としてジニ係数と一致して取り込まれたジニ係数を抱えての貧困測定である。そのため極富裕者所得は不問となり、その側面での格差の及ぼす社会心理的問題については検討不可能な構成とも言える測度とは言えないのだろうか。

⑥ そして相対的貧困概念とは不平等問題であり、その不平等を心理社会的な側面の捕捉においてとらえようとするのが相対的貧困指標（多軸）であった。古典的な貧困概念は社会の低所得状態の問題であり、不平等問題は社会全体の構造問題であり、この二つの概念の相違点において、セン測度の構成は、どのような調整をかかえる事になるのだろうか。

⑦ この問題に関連して、貧困測度や不平等測度に対する公理分析的な解析と言う手法が工夫されつつ、貧困なり、不平等の属性、概念規定との関係から、その測度の特徴をながめ、その特徴によって貧困なり不平等なりの概念の組み立てを解析しようとしている。この思考を逆向きに採用するならば、貧困のある側面・属性に注目して、その測度のはじき出す数字の傾向との関係を把握しながら、貧困概念の含意を再考するといった公理分析の効果が活用されている。

※公理分析：一定の関数関係としての、開発された貧困測度がはじき出す値の傾向を、多数の公理との関係を通して、読み解いてゆき、その関数の傾向性を分析する事、それが公理分析の手法である。

⑧ センは、貧困指標が満たすべき公理として【「焦点性公理」（貧困ライン以下の者の所得

に変化が無ければ、貧困ラインを超える超えるものの所得変化は貧困指数に影響をあたえない)、「単調性公理」(他の条件を一定として、貧困ライン以下の者所得が減少した場合に貧困指標は増加する)、「移転公理」(貧困層内部で、相対的所得が少ない者から多い者に所得が移転されるが、所得移転を受けた者も貧困ライン以下にとどまる場合に、貧困指数は増加する) などを挙げている[1]】

⑨ しかし貧困指数も、不平等指数も、指数としての表現を求めれば、指数的に算出されるべき構成として、何を分母にするのか、分母に対して何の量を分子において比較するのかと言った、比の形式を採らざるを得ず、この要請の中でセン測度の関数関係、その構成が成立している。

⑩ そこでセン測度は、貧困の実態を比例関係という数理において示そうとするところから、貧困測度、不平等測度の研究のなかでのセン測度の開発は 80 年代初頭でもあり、必ずしもコンピュータ技術を前提にしないのであろうと思われる。推計学的統計学的手法での、測度の傾向性を分析的に解明しようとすることに向かい、その切り口としての「公理」が開発されざるを得なかったと思われる。そこでこの公理には、概念の分析視角という意味合い、そうした機能が求められている。

いわば推計学的、統計学的な道筋に従って、社会調査からの情報を、統計的処理を経て推計を行い、現実の社会状態と突き合わせて、その懸隔を突き合わせながら推計を重ねて実態に迫る、その切り口といえるのであろう。

しかしセン測度は、いわばこの逆の方向性で関数関係を構築している。「順位付けされた相対的剥奪」の公理をもってデータを集計する事によって、貧困問題の中の不平等問題と受け取れるジニ係数として表れたわけである。そしてセン測度のヴァリエーションと言うべき多数のセン測度改良タイプが導出され、それが FTG 指数である。

⑪ これらの測度群の基本的形式としてのセン測度、その中のジニ係数は、貧困が不平等概念を抱えているという、貧困と不平等の関係についての数理的表現と考える事ができようから、いわば社会科学的な概念枠の検討と、数理問題をかみ合わせて進めた社会的厚生関数の構築としてうけとめられよう。「公理(貧困、不平等概念の持つべき特性)」と「関数の構造」の両面から、貧困測度のはじき出す値の特徴、概念枠を探り出すわけであろう。

⑫　公理分析の手法と厚生経済学

[1] 黒崎卓『アマルティア・センの世界』P85　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

厚生経済学は「効用アプローチ」として、検討されている。それは「1つは選択（顕示選好）アプローチであり，他の１つは「倫理的アプローチ」として提示されており、アマルティア・センのアプローチは、各社会における正義の観念のすり合わせとされ、それが倫理的アプローチとされている。

極貧者の多い社会と、貧困線すれすれの比較的所得の高い人々の多い社会、その貧困度は前者の貧困度が高く導出されるべきとして、それらを正義とする「正義のアプローチ」、あるいは「倫理的アプローチ」とされている。

⑬ 今 EU では欧州 2020 戦略の下で、貧困政策、脱排除、社会的包摂を軸にする社会政策が進められ、その政策策定のための社会調査が様々に開発され考案されている。そこでは、完備的な貧困測度の追求を自己目的化するのではなく、政策策定のために、貧困や不平等問題を構成する多様な観点、要因に当たって、その間の相互依存性を前提にした解析へと動いている。（当ブログの新しい社会保障・欧州 2020 戦略下の貧困指標を参照）

⑭ しかし貧困測定に完備的な測度を開発し得るという前提については、貧困とはそもそも貧困線をどう設定するかによって、基礎的なデータ数も変化せざるを得ず、こうした相対性を抱える社会事象であり、貧困概念の措定形式に戻って、貧困測定の手法を眺めざるを得ないであろう。（不平等概念も均等分割線との関係で規定される関係的概念である。）

貧困も不平等も共に関係的概念であるという事を踏まえるならば、基本的には所得額は個人の幸せ感「厚生」を示し得るという設定が成立するとしても、「不平等概念」と「貧困概念」の違い、貧困は低所得問題であり、不平等問題は社会全体の構造の問題という違いが認められる。セン測度は貧困者の**均等分割線**と社会の**貧困線**を一致させることによって、この概念構成の違いを調整している厚生関数なのだが、比較する他者をこの形に採っている事によって、はみ出た事柄、問題の検討は必要であろう。

この調整点において、セン測度の場合は、富者の所得データは貧困線ラインとして固定されるので、富者の１％と貧者 99%の所得の乖離状態がどれほど大きくなっても、その社会の貧困度には反映できないという結果を生じる、それがセンの貧困測定における隘路なのではないだろうか？

⑮ それは、その社会の不平等を貧困者内部の所得分布より補足し、社会の全体・富裕者の所得は不問であるという形式から生じてくる、社会全体の所得格差が補足されないという、（貧困者内部の所得格差）を示すジニ係数において補足しかねる問題についての検討も必要となろうか。

21 世紀の現実においては、社会内での年収格差は拡大しつつあると思われる。この状況下で富者の収入の莫大さを無視して進まざるを得ないセンの貧困測度の構成でもあろうか。しかし貧困と不平等の概念枠の違いからの調整としてのこの形式でもあり、互いの構成概念上の違いとして、貧困測度内に不平等測度をどう組み込むのか、そのアプローチの問題として理解されよう。

そこで不平等問題は社会全体の動向を補足できるデータによる形式が必要と思われ、かつ(不平等概念・不平等問題)における社会文化的要因の多面性を前提にするならば、所得情報に加えて、多様な社会調査を動員しての相互の影響を検討しつつの、貧困の調査の形式を採用している、EU の多軸的に社会調査のさまざま、それらの相互の貧困測定との影響を踏まえて進める貧困政策策定の手法が、妥当なのではないだろうか？

例えば、所得不平等問題、住宅条件の貧困、教育機会の不平等問題、文化活動への参加などと、多面的な社会調査を総動員する形式は、関係概念としての不平等と貧困の測定において、多方位性をもって社会状態を把握できる手法であり、一つの問題が及ぼす他方位への影響を把握できるなどの、他方向からのアプローチをも可能にすると思われ、社会政策策定のための基礎情報を求めるにあたり、優れているのではないだろうか。

⑯ このような厚生経済学的な貧困アプローチを眺める時に、「厚生」という「人間の幸せ感」と言う概念を軸にしてその大小を測り得るとして進める厚生経済学の枠組みは、様々な社会の貧困や不平等の度合いを測り比べ、貧困政策の効果測定を進め、政策評価に適用するといった、厚生経済学に期待される適用範囲において、その適用の範囲が問われざるを得ないと考えられる。

この点について、セン測度の評価、その貧困概念と不平等概念の抽出、互いの関係の評価を見渡しつつ、厚生経済学的アプローチは、必要な条件を付与しつつ、一定の限定された範囲や条件下において、妥当な評価を進める事の可能な体系として、そうした有効性を確認できよう。

貧困測定に係る完備的な測度は特定不能であり、しかし様々な条件を付与しつつ、限定された範囲内内での検討の為に援用できる評価軸としてあり、そのような体系としての有効性を保持していると言えよう。　2022/0610